

ひまわり



令和3年1月25日(月)

ヒマラヤのオウム



地域の方からいただいた冊子に、僧侶の小林澤應こばやし たくおうさんの文章がありました。文中に次の説話（出典 雑宝藏經「そうほうそうきょう」）が使われていました。これは、小林さんが高校生の時、薬師寺元管長、故高田好胤たかた こういんさんの法話の一節として聞いたものだそうです。また、小林さんが、高田さんの弟子になろうと思ったきっかけの法話でもあったそうです。まずは読んでください。

ヒマラヤ山の中腹の竹やぶに、たくさんの鳥や獣とともに一羽のオウムが住んでおりました。ある時、大風が吹いて竹と竹がすれあい、火が起こり、風にあおられて、ついに山火事となり鳥や獣は逃げ場を失い、泣き叫んでおりました。そこでオウムはこの山火事を消し止めようと思い立ちました。山の麓の池に飛び込み翼を浸し、燃えたぎる火の上に雫（しずく）を振りまいて、たゆまずこれを何千何万回と繰り返ししましたが、火は一向に衰えません。けれどもその繰り返しをやめようとはしませんでした。

この情景を天空から見ておられた仏様が、オウムにお尋ねになりました。「お前さんの行為はけなげであるが、数十里にわたるこの山火事を、お前さんの翼の雫でどうして消し止めることができようか」。すると、オウムが答えました。「志のあるところにできないことはありません。大自然への恩返しとともに、仲間を救いたいという一心でしているだけです。どうかこれを続けさせてください」。これを聞かれた仏様は、大きくうなずかれました。

そして、不思議な力をあらわしてくださいました。天の一角に出てきた黒い雲がみるみる空一面に広がり、やがて雨が降り出して、大雨となりました。こうしてオウムの偉大な志と報恩感謝の心により、盛んをきわめた山火事が消し止められました。

さて、皆さんはこの説話をどのようにとらえますか。さまざまなとらえ方ができるとことでしょう。また、この説話を人生に生かすとしたら、皆さんなら、どのような生かし方をしますか。日々の生き方の参考にしてみてください。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。

【東住吉中学校】で検索

